

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 22 日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720204

研究課題名(和文)「標準語」の影響下における明治大正期関西弁の実態

研究課題名(英文) Kansai Dialect under the influence of Hyojungo after Meiji period

研究代表者

村上 謙 (MURAKAMI, Ken)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：20431728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：明治大正期以降の関西弁が「標準語」からどのような影響を受け、変容を遂げたかについて明らかにした。また、その延長線上にある近世期にまでさかのぼって、どうであったかについても検討した。それと同時に、関西を含めた全国で、当時、どのような標準語観が存在していたかについて考察した。また、近世語研究や日本語史研究における標準語史観についても考察を加えた。これらは国語意識史の解明につながるものである。

研究成果の概要(英文)：This research analyzed Kansai dialect after Meiji era, especially focused on the way of which Hyojungo gave some influences to Kansai dialect.

研究分野：日本語史

キーワード：日本語史

1. 研究開始当初の背景

近畿地方で話されている関西弁は日本語の方言として大きな勢力を誇っており、現代語としての研究は盛んに行われている。しかし、その歴史的な側面に対する研究についてはまだ蓄積が少ない。村上はそうした流れを積極的に変えるべく、2000年以降、近世後期における関西弁を中心に研究し、いくつかの言語事象の解明に貢献してきた。しかしそうした村上の活動も、多くは近世後期のみを中心としたものであったために、近代関西弁の始まりの部分はいくらか明らかにしたが、その歴史的な流れを完全には描きだせていなかった。課題として残してきたのは、幕末以降、つまり明治、大正期の関西弁の動向であった。そこで、近年は科学研究費補助金(平成20~23年度、課題名「明治大正期関西弁の史的研究」)を得て、明治大正期関西弁についての資料整備と諸問題の抽出、研究を行ってきた。その成果のいくつかについては、すでに研究発表や学術論文の形で公開したが、この明治期以降の関西弁もまだほとんど手がつけられていない領域であって、日本語史的にも方言学的にも早急な対応が必要な分野であった。

2. 研究の目的

本課題の目的として設定したのは、「明治大正期当時の関西弁が「標準語」からどの程度の影響を受けたか」という視点であった。これまでのところ、明治大正期の関西弁は一地域の方言として研究されてはいたものの、明治以降に策定された標準語の影響を受けた、いわゆる「ネオ方言」の要素を含んでいた可能性についてはほとんど検討されることがなかった。明治期、日本全国のことばづかいを「統一」するものとして標準語が策定されたわけであるから、関西地方としてその影響を受けずにはいられなかったはずである。しかしながら、幕末あたりまでは関西弁が全国の方言に影響を与える「威信言語」であったと長らく見なされてきたために、明治期を境として、逆に影響を受ける側になった、という発想はなかなか出てこなかった。そこで、本課題では、「ネオ方言」としての史的变化のあり方、という見通しを持った関西弁史研究を目指したのである。その過程で、標準語ならびに関西弁史(上方語研究)についての学史的な理解を深めることも要請された。

3. 研究の方法

大きく3点である。

(1)資料整備

明治時代以降の関西弁資料の発掘、収集と、

そのテキストデータ化を行った。研究の基盤整備事業である。

(2)明治大正期以降における標準語観の検討資料整備と同時に、関西を含めた全国で、当時、どのような標準語観が存在していたかについて考察した。また、近世語研究や日本語史研究における標準語史観についても考察を加えた。これらは国語意識史の解明につながるものである。

(3)文法問題の抽出と研究、解明

こうした基盤整備および考察と並行して、明治大正期の関西弁における標準語の影響と、使用実態を明らかにした。

4. 研究成果

以下、発表した学術論文の主なものについての要約を記す。なお、本課題の中心的興味は明治大正期であったが、いくつかの論文においては、それに前接する近世期にまで視野を広げ、かなり長いスパンで論じることができた。これは当初の予想を超える成果であった。

(1)「ジャからヤへ 明治大正期関西弁指定表現体系における「標準語化」の影響」(2013年10月20日、『近代語研究』第17集, pp.97-114, 武蔵野書院)

明治大正期関西弁における最も急速かつ重大な変化のひとつとして、指定表現形式ジャからヤへの交替がある。本稿では、中世後半から300年の長きにわたって安定的に勢力を保持してきたジャが、なぜ、明治後半という時期に、しかも僅か20年程度でヤに交替したのか、という疑問について論じた。

(2)「近世後期上方における待遇表現化のコーロケーション」

(2014年11月15日、『日本語学』33-14, pp.152-161, 明治書院)

現在、国立国語研究所を中心に開発中の日本語歴史コーパスの試作版の一部を用いて、近世後期上方語の待遇表現化について論じた。なお、表題は近世後期となっているが、そこで論じた待遇表現形式のほとんどは明治以降の関西弁や標準語でも用いられるものであって、その連続性を視野に入れつつ調査に当たったことは言うまでもない。

(3)「近世語研究の学史的展開 戦前における「対立」の思想を中心に」

(2015年2月24日、『近代語研究』第18集, pp.227-244, 武蔵野書院)

明治後半以降のいわゆる言語学的手法による近代語研究の学史的動向について、「二元対立」という術語を視点の中心に据えて論じたもの。本稿では特に、学の黎明期である戦前の展開について論じたが、言語学的手法を用いた近世語研究が標準語の史的保証に淵

源することと、それに端を発する「(二元)対立」の思想や「連結」の思想、戦後まで続く研究動向の一端などを読み直した。なお、本稿で述べた近世語研究の学史的展開は、近年野村剛史を中心として議論が活発化している「スタンダード」研究と、その受容のあり方にも関わってくると村上は考えている。

(4) 「近世後期上方における遊里語のあり方」
(2015年3月15日、『埼玉大学国語教育論叢』第17・18合併号, pp.1-10, 埼玉大学国語教育学会)

近世後期上方語の課題として、資料面での制約がある。すなわち、現存資料としては、洒落本がその大半を占めるため、遊里語を中心としたことばづかいの分析から当時の口語を再構せねばならないという制約である。本稿では当時の遊里語がどのような状況であったかについて、論じた。

(5) 「近世上方における二段活用の一段化とその後の展開」

(2016年5月1日、『国語と国文学』93-5, pp.1-15, 明治書院)

近世以降の上方における動詞活用体系の最大の変化である二段活用の一段化を、その後の連用形命令法や連用形+ンカ形、一段化動詞などに関連付けて把握できることを論じた。

(6) 「近世上方語研究における研究手法について 用例収集と分析・解釈」

(2016年9月刊行予定、『近代語研究』第19集, pp.1-15, 武蔵野書院)

近世以降の上方語研究における研究手法を論じたもの。まず、資料の扱いと用例収集に際しての心構えについて論じ、さらに、収集した用例を、時間軸の上にきちんと定位させ、その先後関係を重視しつつ解釈する、という、ごく当然ながらも他の時代語研究では望み得ない手法について論じた。

(7) 「森勇太「近世上方における連用形命令の成立」に対する所感・反論」

(2014年1月1日、『日本語の研究』256, pp.72-76, 武蔵野書院)

森勇太氏の論文に対する所感と反論を述べたもの。連用形命令法に関する村上説への批判に対する回答。短文であるが、この議論については各種の学界展望などでも取り上げられ、上方語研究における研究手法の再検討を促すものとなった。なお、この議論の延長上で上記(6)の学術論文を執筆することとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8件)

村上謙「近世上方語研究における研究手法について 用例収集と分析・解釈」
(査読なし, 2016年9月刊行予定, 『近代語研究』第19集, pp.1-15, 武蔵野書院)

村上謙「近世上方における二段活用の一段化とその後の展開」

(査読あり, 2016年5月1日, 『国語と国文学』93-5, pp.1-15, 明治書院)

村上謙「近世後期上方における遊里語のあり方」

(査読あり, 2015年3月15日, 『埼玉大学国語教育論叢』第17・18合併号, pp.1-10, 埼玉大学国語教育学会)

村上謙「近世語研究の学史的展開 戦前における「対立」の思想を中心に」

(査読なし, 2015年2月24日, 『近代語研究』第18集, pp.227-244, 武蔵野書院)

村上謙「近世後期上方における待遇表現化のコロケーション」

(査読なし, 2014年11月15日, 『日本語学』33-14, pp.152-161, 明治書院)

村上謙「森勇太「近世上方における連用形命令の成立」に対する所感・反論」

(査読あり, 2014年1月1日, 『日本語の研究』256, pp.72-76, 武蔵野書院)

村上謙「ジャからヤへ 明治大正期関西弁指定表現体系における「標準語化」の影響」

(査読なし, 2013年10月20日, 『近代語研究』第17集, pp.97-114, 武蔵野書院)

村上謙「明治大正期関西弁資料としての曾我迺家五郎喜劇脚本群」

(査読あり, 2013年3月15日, 『埼玉大学国語教育論叢』第16号, pp.1-15, 埼玉大学国語教育学会)

〔学会発表〕(計 2件)

村上謙「関西弁研究」

(埼玉大学国語教育学会 2012年度例会, 2013年2月9日, 埼玉大学(埼玉県・さいたま市))

岡部嘉幸・村上謙「デハナイ、デナイ、ジャナイ 近世における否定表現一斑」

(NINJAL「通時コーパス」プロジェクト, 2012年7月31日, 国立国語研究所(東京都・立川市))

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 謙 (MURAKAMI, Ken)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：20431728

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：